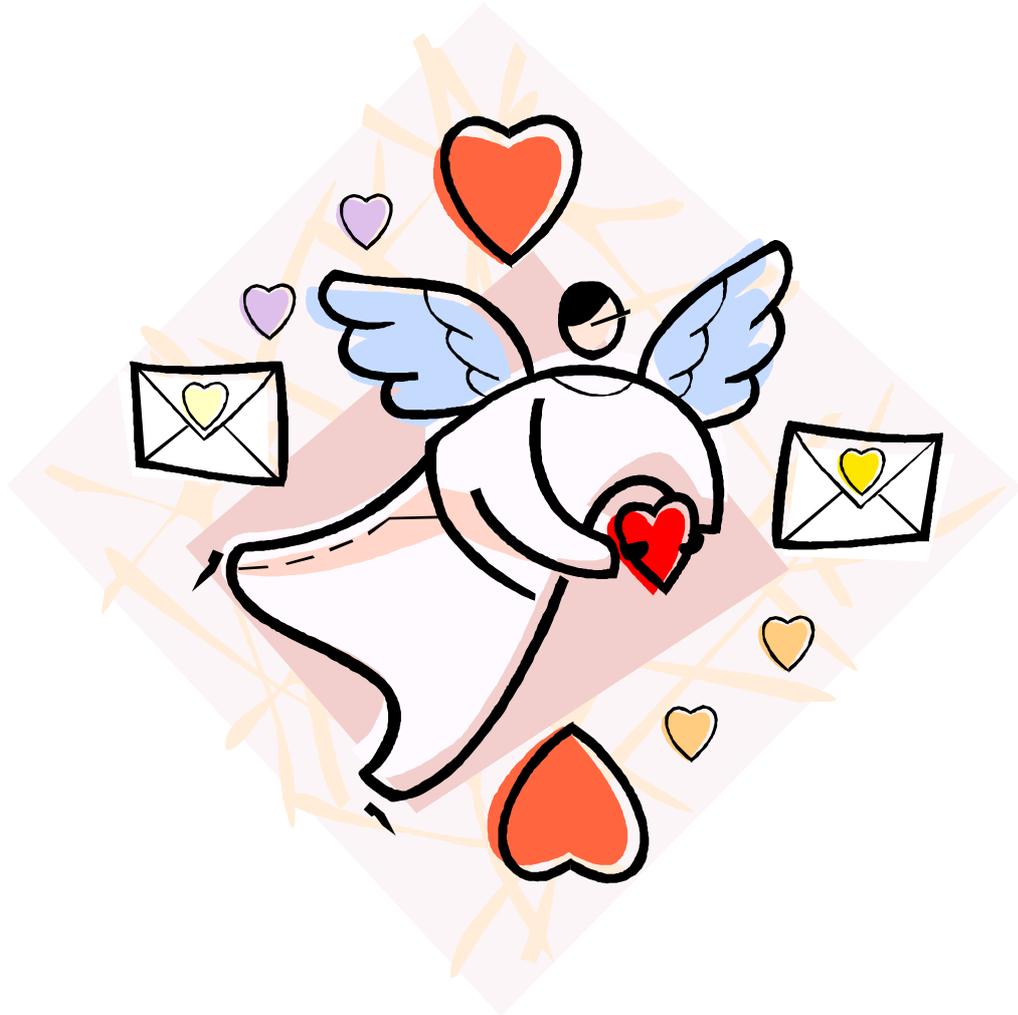




平成25年度

福祉の作文 しあわせの一行詩集



玉城町社会福祉協議会

目次 『福祉の作文』

特選

《小学生の部》

人のために自分ができること

田丸小学校 五年 西村 莉侑^{りあ}・・・1

《中学生の部》

大切な家族

玉城中学校 三年 大世古菜那^{なな}・・・2

入選

《小学生の部》

ぼくが出会ったカッコいい人たち

田丸小学校 三年 森井 大走^{やまと}・・・4

努力の少年

有田小学校 六年 飯鳶 哲平^{てっぺい}・・・5

高齢者から学んだこと

有田小学校 六年 高瀬 椎名^{しいな}・・・6

《中学生の部》

障害のある人に関する問題

玉城中学校 二年 森本 美優^{みゆう}・・・7

『しあわせの一行詩』 優秀作品

・・・9

特選

『人のために自分ができること』

田丸小学校 六年 西村 莉侑

私には九十才になるおばあちゃんがあります。よく笑いよくしゃべるとても楽しいおばあちゃんです。いつしよの家には住んでいないけど、すぐに会いにいけるきよりに住んでいます。おばあちゃんは昔からすごく働き者だったと聞きました。それは、おばあちゃんの手を見ればすぐにわかります。手がゴツゴツしているからです。曲がっている手を見るといつぱい働いた手だとわかります。そんなおばあちゃんに畑仕事をたくさん教えてもらいました。

そんなおばあちゃんはつえがなくては歩けません。だから外に行くときはつえをついて歩きます。すごくゆっくりで、私の家に歩いてきてくれる時は、すごく心配になります。だから私はおばあちゃんの手を持ってあげていつしよに歩きます。ゆっくりゆっくりおばあちゃんの歩くはやささに合わせて歩きます。

そんな時おばあちゃんは、
「いつしよに歩いてくれると安心して歩けるわ。ありがとう。」
と喜んでくれました。そう言われて私はすごくうれしかったです。

耳も遠いおばあちゃんと話す時はゆっくり大きな声で話します。おばあちゃんの家が電話がなっておばあちゃんがとつたけと聞きとれず私がかわりに聞いたこともありました

「大事な用だったのですごく助かったわ。」

と言われました。それからなるべく私が電話にでるようにしています。

不自由の多いおばあちゃんに何をしてあげられるかわからなければ、私なりに手助けできることはしてあげたいと思います。それはおばあちゃんだけじゃなく誰に対しても、同じ気持ちです。困っている人がいたら、声をかけたりしたいです。私はたまに電車に乗る機会がありますが、そこには高れい者やにんぶさん、障害者の方専用のイスがあります。そのイスに平気ですわっている人たちを見たことがあります。その時は、すごく残念で悲しい気持ちになりました。私だったらすすむべき人に席をゆずります。もっとこの世の中の人たちが、相手の立場になって行動をとれるといいのになあと思います。

福祉という言葉の意味はむずかしくてよくわかりませんでしたが、自分なりに考えました。何かをしてあげたいと思う気持ちや、相手を思いやる気持ちが、福祉につながっていくと思うので私は困っている人に席をゆずったり、手をさしのべられるようになりたいです。そして世の中の人々が、笑顔で生活できるようにするために、私ができることはいつも笑顔でいることだと思います。笑顔でいればいやなこと悲しいことも忘れられるし、元氣や勇氣もあたえられると思います。そしてみんなが幸せな気持ちになれると思います。人のために私ができることは、何でも進んでいきたいです。まずは身近にいるおばあちゃんの手助けをたくさんしていきたいです。

特選

『大切な家族』

玉城中学校 三年 大世古 菜那

私には、今年で九十三歳になるひいおばあちゃんがいいます。私が小さかったころは、たびたび家に来てくれて、私のお世話をしてくれたり、毎日のように遊んでくれました。でも今は、昔のことはよく覚えていてるけど、ついさっきのことを忘れたり、何度も同じことを聞き返すようになりました。私のおばあちゃんは毎日朝昼晩とひいおばあちゃんの家に行き、ご飯を届け、身の周りの世話をしています。毎日大変だなと思います。私もたまに家に行くけど、いつもつれしそくに話をしてくれます。私は、自分の名前を忘れてしまわないだろうかと不安になることもあるけど、もし忘れてしまっても私の大事な家族であることには変わりないので、ひいおばあちゃんを大切にしようと思っています。

私は最近、「孤独死」や「核家族」といった言葉をよく聞いた目にしたります。それは、自分の子や孫と、仕事の関係や家族のつながりの弱さなどが原因で、いつしよに住めなくなるから起こってくるのだと思います。そういう点で、私のひいおばあちゃんは、いつも自分のことを気にかけてくれている娘がいて幸せだなと思います。私は高齢者の人の「孤独死」というのを聞くとても悲しくなります。私もだれにも気づかれず一人さみしく死んでいくのは絶対にいやです。最近は、公共施設の階段がスロープになったり、食品の宅配サービスがあったり

と、高齢の方が一人で生活していきやすいようにはなつたと思います。でも、さみしさは変わらないと思います。どれだけ周りの人や環境が自分にやさしくなつたって、やっぱり家族が一番だと思います。それにまだ、上の階に行くのにエレベーターやエスカレーターがなく、階段だけという公共施設もたくさんあります。私は階段があれば上の階に行けるし、骨折などの大ケガもしたことがないからそういうところの不便さはあまりわかりません。でも骨折してしまった友達を見ると、段差を昇るのも周りの人の助けがあつてやつとというほどの苦労でした。私のひいおばあちゃんも足腰がだんだん弱くなつてきています。危険だからと家の二階にも行けません。でも、たまにおばあちゃんと二人で運動のために近所を歩いています。私もできるかぎりそういうちょっとしたサポートをしていきたいと思っています。

私は、小学生のころボランティアとして老人ホームに行ったことがあります。その時は、車いすの人がたくさんいて、その時の私は、まだあまり高齢の方と接したことがなかったので、自分たちとは何か違うように思つてしまいました。でもいっしょに遊んだり、話したりして笑顔になつてもらえると、私もうれしくて楽しくなりました。「こわい」とか「気持ちが悪い」とも思わなくなりました。今も吹奏楽部の演奏活動の一環として老人ホームを訪れることがあるけど、そういう時は目のあつた人に笑いかけるなど少しでも楽しくなればと思うようになりました。そういうふうに私たちのような若い世代が高齢者と接し

ていく環境がもっとたくさんあればいいのにと私は思います。

経済的な課題、働いたり住んだりする環境などさまざまな理由があるけれど、私はみんなで楽しく協力して生活できるようなれがいいなと思います。そのために私は、一番身近にいる家族、もちろんひいおばあちゃんも大切にしていこうと思います。みんながさみしく生活していくことがないようにできることを少しでもやりたいと思います。そして、みんなで楽しく協力して生活できればいいなと思います。





入選

『ぼくが出会ったかっこいい人たち』

田丸小学校 三年 森井 大走

前に、田丸小学校の体育館で車いすバスケットボールをしている足が不自由な人たちの試合を見学させてもらいました。足がない人たちや、けがをしている人たちが、いつしようにけんめいバスケットボールのボールをパスしあって、たまに、とれなかったときは、自分から相手の車いすにぶつかって、ボールをうばいあいっこしていました。ぼくは、それを見て、こんなに足や手がうごかない人たちなのに、あの人たちは、自分からやるうというゆうきがあつたから車いすバスケットボールをはじめめたんだと思いました。

もし、ぼくが足とか手がなかったら、車いすバスケットボールとかはしれないと思うのに、車いすバスケットボールをやっている人たちは、自分からやってみようと思うどりよくがあつたからこそできるんだと思いました。

もし、ぼくが、じこや、病気で手や足が動かなくなったりしたら落ちこんでしまって、家からあまり出ないとか、バスケットとかをして笑顔になつたり楽しい気持ちにならないだろうと思いました。

でもぼくが見た人たちはとても楽しそうにバスケットボールをやっているのです、体の不自由じゃないぼくの方が、いつも言うことを聞かなかつたり、ケンカもしたり、おこつたりいんな事をあきらめたりしていたと思うと、少しはずかしくなりま

した。ぼくは今回とてもいい体けんをしたと思います。

この人たちに、出会えたおかげで、「できない」とか「むり」とかをすぐに言わずに、この人たちのように「まだがんばれる」「もう少しできる」という気持ちになろう、あきらめる前に、いろんなことをチャレンジしよう、おもえるようになりました。ほんとうにぼくは、いい体けんができたと思うと、とてもいい気持ちになりました。

これから、外で不自由な人たちが、もしこまっていたりしたら、たすけようと思うし、がんばってほしいという気持ちにかわりました。そして、ぼくも、学校でも、野球でも、いろんなことをすくにあきらめずに、がんばろうと思いました。



入選

『努力の少年』

有田小学校 六年 飯薦 哲平

ぼくは、耳が不自由な方へのせっし方を取り上げました。

母が勤めるある高校に、耳が不自由な人がいてそれでも野球をしている姿を見て凄いと思ったので取り上げました。

ぼくも野球をやっていて大好きな野球を一週間に4回楽しんでやっています。いつも母や父、祖父に連れていってもらってただ試合に勝つ事を考えています。でもある日の夕食の時、母がみんなにこんな話をしました。

「私の学校の野球部に耳が聞こえやん子があつて、でもレギュラーで出ていてその子のために他の選手がその子1人に合わせとんの。」

ぼくはそれを聞いて毎日、普通に野球をしている自分が情けないと思いました。

母がその話をしてから数日後兄が試合をしました。兄はその

日、

「あの子凄い。」

と一言。ぼくがどうしてか尋ねると、

「何も耳が聞こえやんのにみんなと同じように伸び伸び野球をやつて、ファインプレーでチーム助けとつた。」

と言っていました。伸び伸び野球をやっているのは、きっと彼を支えているチームメイトのおかげでもあるんじゃないかと思いました。彼は、常に横に選手がついていて手話で相手の人が

言っているのを伝えたり、自分が言いたい事を、手話や紙に文字を書いて伝えたりするそれで、一つ気になる事がありました。それは、声をかけ合ってプレーしたりするとき、ぶつかったりしないのだろうかという事と、絶対につらいと思うときが一度はあると思うけど、どうしてここまでずっと野球をやり続けられるのだろうかということです。じっくり考えると、なんとなく彼の努力が分かった気がします。

こうした体が思うように動かなくても、絶対にあきらめず大好きな野球を夢中になって続ける彼の姿がとてもカッコイイと思います。そして野球をやれていることに感謝の気持ちを持ちこれからもがんばりたいです。



入選

『高齢者から学んだこと』

有田小学校 六年 高瀬 椎名

私は先日、友だちと社会福祉協議会の楽笑会という高齢者の方といっしょに過ごせるイベントに参加しました。そこで、高齢者の方といっしょに遊んだり、戦争のことなどについてたくさん教えてもらって、たくさん学んだことがあります。このテーマにした理由は私が楽笑会でアンケートをとったある女性は二十才ぐらいのときに、戦争を経験などについてアンケートをとりました。まず、私は二十才ぐらいに戦争を経験して、まだわかいのにかわいそうだなと思いました。そう思った理由は、女の子だから、オシャレもやりたいだろうし、まだまだ遊びたいだろうし、私だったら、絶対いやだし、絶対生きのびたいです。

次に、高齢者の方といっしょにカローリングをやりました。その女性は、足が不自由なのでカローリングに参加することができませんでした。かわいそうだなと思いました。私がもし、その女性のように足が不自由だったら、みんなといっしょにカローリングに参加したいと思うから、きつとその女性もみんなといっしょにカローリングに参加したかったと思います。でも今が高齢者にとって一番幸せだと思います。私がそう思った理由は、戦争で人と人が争って、みんなが傷つきました。でも今は、戦争が終わって、平和だと思うからです。私も今が幸せだから、戦争みたいにおそろしいことはやりたくないの今を

大切にしようと思いました。

私は最初に書いた高齢者と遊び、お話をしたり、アンケートをとったりすることは、相手の高齢者の方もうれいだろうし、楽しいだろうし、しかも私も、もちろん楽しかったし、すごく勉強になったので楽笑会みたいな行事にこれからも進んで参加したいと思いました。

私はこれから、高齢者の方たちの行事などがあれば参加していきたいし、交流していきたいと思いました。



入選

『障害のある人に関する問題』

玉城中学校 二年 森本 美優

まず、障害者とはどのような人か？ 障害者とは、何らかの

原因によって、長期にわたり日常生活、または社会生活に相当な制限を受けざるを得ない人の事、わかりやすく言い換えると体や、精神に何らかのハンディキャップを持っている人の総称。

わたしたちは、小さい頃から差別はいけないことだと習ってきました。でも、差別はなくなりません。中には、やったこと、言ったことが差別になるということをまったく気づかずに相手を傷つけ、最悪の場合死ぬことが本当にかくさんあるのです。それは、自分中心の考えで言ったり、やったりすることが多いからです。

ですから、わたしたちは、この世の中にいろいろなハンディをもった人や体質をもった人がいるということを考えて全体のことを考え、周りのひとたちにいたわりの気持ちで接することができる生活をしていかなければならないということだと思えます。私たちは、障害者も健常者も共に生きる社会を作るために、まず障害者を理解することが大切です。障害者は、障害故に不自由です。しかし、不自由であっても、人間としての尊厳は健常者と同じように認められることを願っているのです。だからこそ、障害者に接するときは忘れてはいけなことがあります。困っている障害者を見かけたら「何か私にできることがありますか？」と一声かける勇気をもつこと。もう一つは、「障

害があるから」と決め付けず、個性や能力を見極め、生かす手立てを考えることが、誰もが人格と個性を尊重し合える共生社会が実現できると思いました。生身の人間がさまざまな状態を持つことは当然のことであり、故に「障害」を個人の特質、「個性」としてとらえ、共に生きることが大切です。

障害者の人の中には、体が悪い人や言葉がなかなか話せない人もいます。電車などで体が悪くて車イスに乗っている人がいて邪魔だな、迷惑だなと思ったことはありませんか。でも、それは仕方ないんです。思っても文句を言ってしまったらその人が生きる気力を失ってしまうんじゃないでしょうか。こういうときにあたたかく見守ってあげるのがいいと思います。人は助け合う事こそが一番大切なんです。

障害を持っていてる人に対して差別したり面白半分が悪口を言っている事に対して私は、自分達とちがうからといってバカにしたり面白がることはいけないと思います。もう少し、その人達の気持ちを考えてあげてほしいです。

テレビで、生まれつき耳が聞こえない、自分から話す事ができない障害の子供を持つ母親がテレビに出ていました。その母親は歌を歌うのが好きで子供が生まれたら一緒にたくさんの歌を歌いたいと思っていたんだけど、うまれてきた我が子は、耳に障害があり、自分の歌声を聞かすことも一緒に歌を歌うこともできないと知り、その現実を受け止められず、毎日涙がかわるまで泣き続けたそうです。しかし、何日かしてふと思ったそうです。

「泣いていてはその子に申し訳ないとその子のためにも胸をはって生きていこう」

と、その日から、手話の勉強をしたり、たくさんの本を読んで勉強しました。耳の聞こえない子を育てるのは、本当に大変なことでしたが、なるべく普通の子と同じように、接して色々な物を見たり、色々な物にふれたり、色々な経験をその子にさせました。周りから変な目で見られることもあったけれど自分の信念をつらぬき、子育てをしました。そんな子育てを何年間も続けたその子は、とても明るく笑顔が絶えない子に成長しました。そして、耳が不自由だとは思えないほど、ギターが大好きでギターを演奏するのがとても上手な子になったそうです。この話を聞いて私は、このお母さんは周りから変な目で見られても自分の信念をつらぬき、子供を明るく笑顔がたえない子に成長させたところがすごいし、尊敬しました。みんなも、こんなお母さんみたいになってほしいなあーと思いました。





「しあわせの一行詩」優秀作品

【小学生の部】

特選

きょうだいが産まれた。ぶじ産まれてホッとした。
いままでで、一番うれしかった。

作品への想い

今まで一番うれしかったです。

田丸小学校五年

塩野

幸希こうき

元気ですたまき委員会賞

学校で英語習いながら、いつかはとび出す
大きな世界を思うとき

作品への想い

ほん訳家になりたいので、英語などを勉強しながらこ
れをいつか使えるようになりたいと思っています。未来
に希望を持って幸せになります。

下外城田小学校六年

岡田

華歩かほ

お父さんが早く帰ってきた日、
家族そろってごはんを食べたよ。
家族で食べるごはんは、笑顔であふれていたよ。

作品への想い

いつも帰りがおそいお父さん。家族そろって食べるご
はんは最高です。するとお父さんが「家族でごはんを食
べて幸せやなあ」といって笑顔がかがやいています。

下外城田小学校四年

山口 心里
こころ

へ入 選

いつもありがとくと気持ちを伝えたら、
よろこんでくれた。私も相手も笑っていた。

作品への想い

思いが伝わって、かえってくる返事がきくと幸せにな
れて、うれしい。

田丸小学校五年

田中 綾乃
あやの

〈入選〉

一回友達とケンカした。仲直りしたら、
友達がたくさん増えたようにうれしかった。

作品への想い

一回なんどもちよっかいをだしてきた友達がいて、しかえししたら、ケンカになつてしまつて、それで、仲直りしたら、すつきりしました。その時がうれしかったです。四年生の時の思い出です。

田丸小学校五年

斉藤

貴大 たかひろ

いつも仲よし。たまにけんかもする。
でも、ぼくにとっては大切な友達。

作品への想い

友達といっしょにわらいあったり、おこりあったり、
ないたり、ぼくにとっては友達といるのが安心するし幸
せだと思つ。

有田小学校四年

高瀬

大弥 だいや



【一般の部】

特選

初めてのサロン、みんなの笑顔と拍手で生き返り

作品への想い

妻を亡くし閉じ込めから、初めてのサロン 新人生への会員の笑顔と大きな拍手から生き返った。

小野満 勇

元気ですたまき委員会賞

老人と患者にやさしい元気バス。
社会福祉のありがたさを知る。

作品への想い

夏の終わり頃、戸外での作業中、腰を痛める怪我をして通院の際、バスのお世話になりました。

下村 謙之助



健康しあわせ委員会賞

反抗期まつただ中の双子の孫よ。見栄えしない
“婆ちゃんの味”を今日も完食。
ありがとう！ほんわかし・あ・わ・せ

作品への想い

中学生になり共同体での反抗期。でも「うまいわ」の
ひと言に時々ママに代わっての食事作り。“婆の味”お
だてられ乍ら頑張っています。

山口 満子

平成二十五年 度

玉城町社会福祉大会

「福祉の作文」審査委員

(敬称略)

玉城町長

玉城町社会福祉協議会

会長

辻村 修一

玉城町教育委員会

教育委員長

加藤 禎一

教育長

山口 典郎

玉城町校長会(玉城中学校)

代表

阪江 謙二

玉城町生活福祉課

課長

中村 元紀

玉城町社会福祉協議会

事務局長

西野 公啓

「しあわせの一行詩」審査委員

元気ですたまき委員会

健康しあわせ委員会

社会福祉法人
玉城町社会福祉協議会

〒519-0433

三重県度会郡玉城町勝田 4876-1

TEL:0596-58-6915

FAX:0596-58-6916

発行：平成26年2月11日